

第 17 回手話通訳技能認定試験実技試験

聞取り通訳試験（問題）

第 1 問 テーマ「海の思い出」

おととしの夏、浜辺で拾った、小さな貝殻。白っぽくて、光の加減で少しピンクや黄色にも見える。わたしは、これを手のひらに載せて、じっと見つめることがある。

わたしの家族は、夫と子ども。男の子が二人いて、わたしはパートで勤めている。夫は会社に勤め、家事もいろいろ手伝ってくれている。

それでも、女のわたしは、子どもを産み育て、食事の用意をし、電気・ガス・水道などの支払いから、親せき付き合い、町内会のこと、子どもの学校関係など、毎日を目まぐるしく過ごしてきた。

十年前になるが、下の子が小学三年のときだった。夏休みに家族で海に行った。

二人とも沖で元気に泳ぎ、そろそろ浜にもどろうとしたとき、下の子の足がつってしまい、危うくおぼれてしまうところだった。

それ以来、海には行かなくなった。

それが、おととし、なぜか、下の子が海に行きたいと言いだし、夏休みにまた海に来たのだ。

海で遊んでいた子どもたちに、夫が「怖くないか」と聞いたそう。下の子は、「平気さ。海は好きだよ」と言ったそう。わたしは、帰る日の朝、もう一度この砂浜を歩きたいと思い、夫と散歩した。そのとき見つけたのが、この貝殻だ。

今、こうして貝殻を見つめていると、子どもたちの成長に感謝する思いで、胸が熱くなる。山ほどの家事や、終わることのない日常のあれこれさえも、貝殻の彩りのように、美しさを添えてくれているように思える。

第 2 問 テーマ「愚痴をこぼさないプラス思考」

アメリカ大陸を 4700 キロメートル歩いて横断するレースがあります。名づけて「トランスアメリカ・フットレース」。一日に 74 キロメートル歩いて、それを 64 日間続けてやっと横断する、もちろんミシシッピ川もロッキー山脈もただひたすら歩いて越えるという想像を絶する過酷なレースです。

1993 年の 6 月のレースには 13 人の参加者がいました。その中に日本人が一人。この日本人はこのときが三度目の挑戦でした。スタート時点では 13 人でしたが、途中で脱落する人が続出。

リタイアした人は「ああこんなひどい嵐あらしの日じゃもう歩けない」とか「ああ砂漠で気温が 50 度もある。暑くて歩けたものではない」と、ちょっとでも愚痴を言う人全員がギブ・アップでした。

残った人たちというのは、何があってもさっさっさと歩いて、5センチメートル先が見えないような嵐でも、「ああ嵐だなあ。ずっと続くわけでもあるまい」と言い、砂漠がジリジリ焼けて 50 度でも「ああ砂漠は暑くて広いなあ」と、笑ってしまうほどで、絶対に愚痴は言わない。「まあそういうときもあるわ」と受け入れてゴールインしたのが 6 人。三度目の挑戦だった日本人もその中に入っていました。

第 17 回手話通訳技能認定試験実技試験

読み取り通訳試験（手話表現の要約）

筆記通訳 テーマ「広島と私」

岡山で生まれ育ち、広島に移って 16 年。広島では、毎年 8 月 6 日、ドームの前で年配の男性が原爆の話をする。「妻が出かけた後、原爆が炸裂した。妻を見つけだした時はひどい火傷だった。妻の体のうじ虫を取り、10 年間、世話した」と聞き、感動した。資料館の展示は、悲惨でショックだった。

岡山にいた頃、高校部の時に、バレーボール大会で広島に来た時も、卒業後に、青年部研修で来た時も、資料館を見学したが、ショックは受けなかった。それは、岡山で平和に過ごしていたからだ。広島では、毎年話を聞き、怖さがわかった。

今でも、テロや戦争が続いている。やはり、平和は良い。原爆や戦争のない、平和が続いてほしい。

口頭通訳 テーマ「鼻の手術」

私は、毎年冬になると、鼻水が出て困っていた。病院の内科で検査の結果、病気ではないと言われ、薬をもらい、飲んで寝た。翌朝、鼻水は止まったが、鼻が詰まったようで、苦しく、困った。

今度は、いつも混んでいる耳鼻咽喉科にかかり、鼻の中を診てもらうと、手術が必要だと言われた。翌日、病院で、両腕を固定され、目にカバーをして、手術を受けた。患部を取り除いて、手術が終わった。切除したものは、大きくて驚いた。気付かない内に大きくなっていたと、医師に言われた。

私は、ようやくほっとした。